

築川の洪水被害は本当に起こるの？

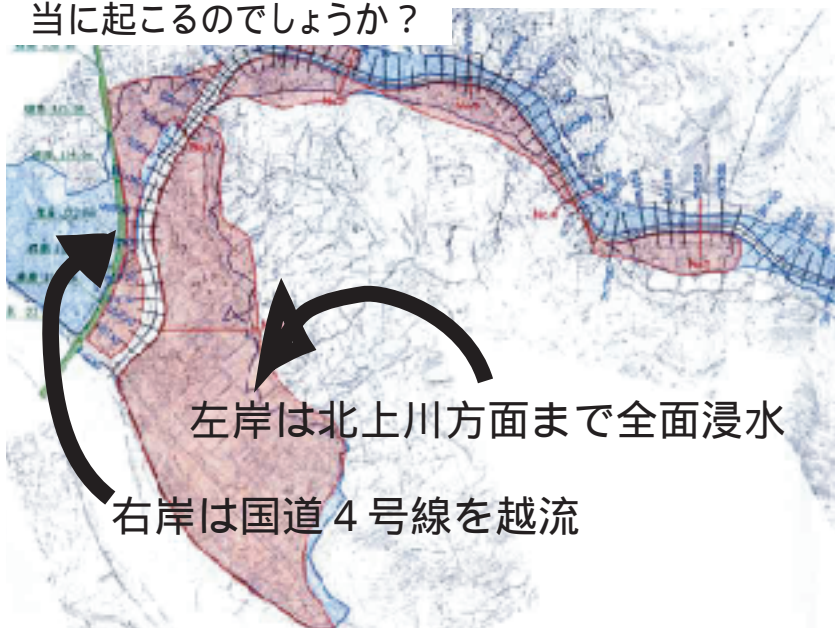
築川ダムに反対する
市民の会 No1

《1》築川ダムは建設費に見合う効果があるのでしょうか？

ダムのような大規模な事業を計画する際、その事業のメリットと建設費用を比較します。建設費を上回るメリットがあると判断されれば事業採択の後工事着手となりますが、その逆の場合「費用がかかる割に効果がない」事業として中止されます。

ダムのメリットとして比較対象になるのは「洪水被害をどれほど軽減できるか」です。岩手県河川課は築川ダムの場合100年に1度起こりうる洪水の最大流量を $780\text{m}^3/\text{s}$ とし、その際に生ずる氾濫の及ぶ区域を右図のように示しました。(赤と青の部分)ダムができれば、この地域が全て洪水氾濫を免れるというわけです。

はたして、これほど広範囲に広がる洪水が本当に起こるのでしょうか？



《2》兩岸とも危険水位より高いのにどうして氾濫するの？

河川課は上の写真に記された兩岸の地点(右岸1km地点・左岸925m地点)を「破堤候補地点」と定め、そこからの洪水氾濫が広範囲に広がるという想定をしています。



しかし、見てのとおり兩岸とも堤防はなく、したがって「破堤する」ことなどありえません。

さらに現在の河川横断図(平成15年岩手県作成)をもとに計算した $780\text{m}^3/\text{s}$ 水位は兩岸天端よりも低く、「氾濫する」ことさえ起こりそうにありません。

そればかりではありません。平成14年時の想定でありながら、使用した地図は平成7年のもの、測量した横断図は河床掘削が行われる以前のものです。(河川課自ら証言)

このため、改修による流下能力の向上は全く反映されていないことになります。

このように河岸の流下能力に対する評価は非常に低く抑えられているのに対し、洪水氾濫水位は実際より過大に見積もられています。

(裏面へ続く)